











□ 夜 聖  
潔 川 谷 長

曙光詩社集

伴 奏

第 貳 輯

(新 春 之 卷)

大 正 六 年 一 月 發 行

川 路 柳 虹 編



東 京

曙 光 詩 社



伴奏 第二輯（新春の巻）目次

地上頌歌……………川路柳虹

律……………同 (二)

愛……………同 (七)

想……………同 (一四)

三行詩六篇……………野口米次郎 (三六)

新佃島閑居之歌……………吉井 勇 (三〇)

夜となれば……………前田夕暮 (三四)

瓦やく家……………澤村胡夷 (三八)

さかつき……………廣川菽泉 (四三)

收穫……………前田春聲 (四五)

悩める人の慰藉（エルスカン）……………曾野簡治譯 (五三)

倦怠……………川路せい子 (五七)

林間のほゝろみ……………澤 ゆき子 (五九)

日輪とよもに……………齋藤佳三 (六四)

高原の春……………秋月露村 (六六)

落日……………松本福督 (六九)

九年後……………霜田靜志 (七一)

あまたなる扉……………平戸廉吉 (七四)

夜光蟲……………曾野簡治 (七七)

夜に入る都……………山崎やすを (八一)

お春……………朱 耀 幹 (八三)

雪降る夜……………浅田真佐子 (八五)

秋 風……………藤 井 月 泉 (八七)

青き夢……………清 水 浮 鳥 (九〇)

戀の屍……………窪 田 照 子 (九三)

耕 作……………倉 石 ち か 良 (九五)

二人はゆく……………大 澤 歌 朗 (九七)

小 曲……………正 井 謙 二 (九九)

いとなみ……………三 幡 よ し 夫 (一〇三)

雪 景……………北 山 哲 平 (一〇四)

初 春……………藤 井 五 郎 雄 (一〇五)

雪影集……………(一〇八)

北 山 哲 平 渡 井 春 雄 吉 村 久 雄

大 澤 忠 一 郎 浅 田 真 佐 子 大 島 武 男

滑 川 義 彦 石 渡 白 映 正 井 謙 二

廣 田 英 之 助 三 幡 よ し 夫 橋 本 八 郎

象徴主義及象徴詩派(ルネ・ギル)……………川 路 柳 虹 (一二六)

雪の小唄……………同 (一三五)

食後の卓……………同 (一三八)

屏 繪 聖夜(自畫自刻)……………長 谷 川 潔

寫真版 「地上頌歌」作者……………

挿 畫 瓦 焼 き……………亞 歐 堂 田 善

包紙装幀「伴奏」……………服 部 愿 夫





M. Kawano  
mai 1916

### 地上頌歌について

私はこゝに少い三部作を諸君に提供する。これらの詩篇はこの二三年來自分の腦裡に動搖してゐた韻律リトムスの斷片である。私は作曲家が一つの基調モティフを得てそれを無数の變調ヴァリエーションに進ませるやうに自分の内部に與る韻律を言葉に代へた。私は論文を書いたのではない。私は詩をかいたのだ。心の動搖を——その諧音を示したのだ。私はこの短い Trilogie が更に私の生涯にもつと大きい Trilogie を形成すべきを疑はない。こゝにある「律」と「愛」とをかいた時間には可成りの距りがある。それはその最初の Motif が容易く自分に湧いて來なかつたからだ。更に「愛」と「想」との間には大きい時間の距りがある。私は私を自然に動かす内部の力を勞費しまいといつても考へる。私は人生の熱愛者の一人としてその奏樂を眞實ならしめやうとする。(作者)

# 地上頌歌

川路柳虹

I 『律』  
II 『愛』  
III 『想』

J'ai gravi la montagne—ma vue tombe du ciel. La terre et le soleil sont  
la même patrie : Mais la terre est mon doux sujet de frénésie. Au gré  
de tous mes sens, Oh ! que la terre est belle !  
—Paul Fort.

私は山に登った——私は天界より眺め下ろす。地と太陽とは同じき祖國だ。しかし地上は吾が狂喜  
の匂やかな対象だ。吾があらゆる感覚の赴くところ、あく何ぞ地上の美しき！

——ポオル、フォール

律

われは心惱む、われは心惹かれる、われは夢みなが  
らに金の駿馬を

幻まぼろしの境さかしより引き入れる。

われは鞭むちちわれは足あし搔かき、われの歩あみと彼かれの歩  
みみを、轡くつわの音おとと拍はく車しゃの響ひびを、鈴かねの音ねと焦いら立つ吐つ息いき  
を、波なみうつ心こころと奔はしれる足あし並なまを

踏みしめ、合あはしめ、なほも夢ゆめみ、

浩蕩たうたうたる大海たいかいの碧あざの底そこへ、

波なみうち沫しぶく闇やみの岩窟いはやへ、

さてまた微かすかに消きえゆく反響はんきやうのごとく

樹立じゆりつのかなたに水影みづかげ爽さわやかな夜よるの湖みづうみ

蘆あしの枯葉かれはに戦たたかける風かぜと黙もくしうつらふ。

われは童女どうじよの心こころを、

われは感じかんじ敏びんき指先ゆびさきを、

快こころよき驚おどろきを、

驚おどろきの快こころよ樂らくを、

木の實の澤にむつみ輝くはけしさを、  
 いつも新に、いつも輝き、いつも夢むる  
 『生』を、その種子を、不可思議の三昧境を、  
 恍惚の肉感を、堪へえざる歡喜の源を、  
 われはのぞむ、われは押し流し、われはか弱き手を  
 ば盲目のごとくにさし伸べて  
 なほも求む、なほもきけり、なほも踊れり、  
 山を、谷間を、岩のあひだを、苦しく堰かるゝ小川の  
 ごとくに  
 海へ、海へと。

翼は焔に焼かれはてゝ渦潮高い青海原に落ち込  
 んだ。救ひを願ふな。もはや聲なき大海の一滴。弱  
 い力が常劫の運命へと流された。

われは悲み、われは悶き、われは苦しき牢獄を夢と  
 地上にかいまみる。

されど切なき慾望は惱みに燃えて立ち昂り  
 復び空へ、闇黒の空へと赤き炬火を打ち振ふ。

あゝいつも嘶き高き金の駿馬よ。  
 心の底に燃え狂ふ欲念の火を忘れざれ、  
 鮮やかに掴む腕を失はざれ。

欲するがまゝなるものをその儘の力に任し、  
 智慧と啓示を自らなる輝きに見出でしめよ。  
 われは熱き唇をもちしときその接吻は甘かりき。  
 隠れたる地上の生命を。  
 汚されたるまことの淫樂を、  
 心のくまで飲みしめて杳かなる光り滴る蒼空へ  
 飛びゆけよ、飛びゆけよ。わが胸の  
 一つの絲、一つの響よ。

## II

## 愛

息をひそめて嵐のうちに  
 すべてのものゝ飛び去るなかに  
 われを地に就かしむるものを思へよ、  
 樹にすぎる鳶のごとく  
 吾は執ねくも手をさしのべ  
 あらゆるものゝ凍る夜半に

空に昇りゆく焔を、  
その強き足音を  
わが脈管のなかに聴く――

われはあらゆる樹木の如く  
地のうへに立てり。

あゝわれは枝を張り

その根は深き底に喰ひ入る、

吾を盡はすものゝ地の下にありて  
限りなき愉悅と力とをおくる。

吾は乞食のごとく地にひれ伏し

その齒は強き心臓をも嚙むべく

吾を狂はす血の在所をば突きとめむ。

そこに全身蓋ふものもなき裸體の女

恍惚と肉感の愉樂に溺れ、

ほの紅む腕をば緑なす海底に

夜の星の如き涼しき瞳は髪のかげに

萬人の瞳を聚む。

吾は古の CENTAURS

野山に角の響充つれば

丘をこえ、草を踏み

醉へる人の足どりさながらに  
 熟せる木の實を手もて掴み、  
 快き嵐に浴みて  
 健かなる肉體を伸ばしえむ。

あゝされどまた夜きたりて  
 わが靈は幻のごとく  
 谷間の墓によるめきかゝり、  
 裂かれたる枝の上に  
 雪は屍をあつめ來るとき  
 何の力か、何の息か、

そこに潜むものもとだえし夜を、  
 吾は曳かれ、吾はむなしく  
 悩みのうへに血もてさみしく  
 わが腕をばこまねがむ――  
 しからざればたゞ手もて地をまさぐり  
 盲人の指に世界を知るが如くに  
 かしこき智慧をそこに悟らむ。

われはかの星の如く  
 または木の實の香りもとめて  
 かなたの森へと飛びゆく小鳥のごとく

流るゝ翼を大空へと  
 一すぢに走らしめむ。  
 よし空には果なき一點なりとも  
 黒くたしかなる存在をば  
 晴れわたる空に羽搏たしめむ。

われはあらゆる樹木のごとく  
 地のうへに立てり。  
 われはそこに嵐を待ち、  
 われは楽しき微風を夢む。  
 空に向ひて鳴りわたる木の葉よ、

ふかき底にひそめる根よ、  
 あゝ大地の愛を吸ひて  
 その脈管を太らせよ、  
 地は限りなきものうち吾を  
 空へと伸ばさしむる焔なれば。



## III

## 想

—

わが欲するものは  
 曉の恍惚、華やかに眼覺め來る空と土、  
 噴泉の迸り。赤らむ樹木、  
 木はその一葉一葉を  
 漲る精力で空に波だせ

一めんかつまに聚りくる光りを  
 光の尖端を  
 幹と樹皮じゆひと梢しやうに浸透せしめ、  
 かぎりなく變化へんがに富む縁みぎりを  
 大空へと捧げる、  
 およ大地よ、  
 健やかで平和に充ちた大地よ、  
 汝は果しもない强健な肉體を  
 永遠に靜かな世界におく。  
 争亂の大地、紛擾の大地、憎惡そうあくと嫉妬しやくとと混迷の大地、  
 汝なんぢの上で人は國と國を争ひ

領域と領域の割譲を血と劍にかへる、  
 闇黙の大地、静かで微笑もせぬ大地よ、魂の大地、聖  
 者の大地よ、

不滅な戦が汝を如何ように揺がすとも  
 人の「愚かさ」が如何やうに汝を唆かすとも  
 笑つてゐる大地よ、花の熾にひらく大地よ、

田園と都市と湖水と丘陵と、  
 かぎりなき反復の稜と廣袤と  
 幾何學的の建築と區劃と設計と  
 絶大な年月の上に積み重ねられた

膂力と智識との「文明」、

あゝ大地よ、  
 おまへはそれらを載せて絶えず輝く、  
 白日の巨大なランプ、曉の薔薇  
 金を延べた田畑、匂ひに咽ぶ花園、  
 おまへは時に處女のごとく微笑し、  
 おまへはまた尼のごとくも沈黙する。

肉欲の大地、苦行と歡樂の大地、  
 PAN と BACCHUS との大地、  
 そしてまた

APOLLON を讚美する大地、

吾は羊にしてまた駿馬の狂奔を知る妖獸、

吾はそこに新しき祭壇と焔を

殿堂と墳墓を

生々の緑と苦き灰色とを以て象る。

吾を打ちのめす「死」と「悪運」を、凶暴の魔女を、

その毒ある舌のために、刺ある痛みのために、

その陣痛と瘡とを、

わが靈の苦味として心臓に

强健な血と化して輸入する、

吾は大地の愛のために、

天上の愛を知る、

吾は地の骨をとつて

天上の礎とする、

われは悪魔を驅つて

天使の琴をかき鳴らす。

暁が目覺めた、暁が目醒めた、

地は一齋にその警鐘を亂打し、

太き動脈とあらゆる末梢の血管を

良き靈のために合奏する、

そこには永遠の若さ——路上を盲ひ乍ら

薄明と闇と貧困と

たえず苛み傷かれた魂が蒼ざめ乍らやつてくる、  
弱い手をのばし乍ら一人の若ものが  
哀へた肺と燃えつきんとする心臓とを捧けてや  
つてくる、

まだ路がある、まだ路がある、

汝の歩みそのものが若さだ、永遠を知る若さだ、永  
遠の生命をもつ誇りだ、

汝を苦しめる貧困、パンの一片もあたへられない  
貧困、

しかし乍ら汝の後に立つ「死」を齒噛みし乍ら

汝の魂の祭壇を明るくしようとする手をもつて

格闘する、

その闘ひが世界に幸福の種子を播く

曙だ。

人間の詩の輝く刹那だ。大地と交接する

肉の思想だ。恍惚の管絃樂だ、

吾は嵐の暴力を含む――

その階音の一つ一つに随順する、――随順しうる  
樹木だ、繁り合ふ木の葉の一つだ。

焔を採れ、焼くがまゝの焔をとれ、  
森を、山を、都市を、田園を、

焼きつくす焔をとれ、汝の胸に、

熱愛がすべてだ、象の牙よりも強く

麥芽の發酵よりも熾んなる

熱愛がすべてだ、

汝の胸に溢るゝ焔が

汝の製作を完成する、今ある如く、

またまさに來らむとする苦熱の如く

頭を悩まし腕を苦める

偉大な創造よ、汝の詩よ、

焔のまゝに溶け入れよ、自らなる光を放てよ、  
溶爐に散る火花の如く、重く執ねく  
汝の思想をそのまゝに響となせ、音階となせ、  
吾に求むるものは樂人の心、人生の作曲家、  
また聲調を調律し整齊する  
靜思と技巧の彫塑家——あらゆる面と稜と容積と  
に

辭句を安泰ならしめる技術家、

されど計るなかれ、數量する勿れ、

汝の精神を鑄型に入れて琢く勿れ、

驚異を望む勿れ、精製をのぞむ勿れ、

吾が熱愛があらゆる調和を生む、——偏るなき自然  
 の姿を生む、自らなる静謐を生む、  
 大地に生へた生へぬきの樹木  
 その上に鳴る嵐、その上に飛ぶ小鳥、  
 吾れは土塗れに働く耕人の如く  
 吾が血の流れそぐ土壌の一塊を  
 詩の最上の祭壇に投げつける、  
 人生讃賞、地上の頌歌、永遠の詩歌、  
 そして貧しき一人の人間！

三行詩六篇

野口米次郎

新佃島閑居之歌

吉井 勇

夜となれば

前田 夕暮

瓦やく家

澤村 胡夷

## 三行詩六篇

野口米次郎

A  
 TEMPLE by the clouds.  
 Down march the days and the pains.  
 What hear I, brothers?

雲に添つた殿堂——  
 下を『時』と、悲みが進軍する。  
 聞くところの聲は何？

What is Life? A voice,  
 A thought, a light on the dark,—  
 Lo, crow in the sky.

生とは何？一つの聲、  
 一つの思想、暗さの上の一光明——  
 見よ空に烏一羽。

The seas sleep. The stars—  
 They're where? Oh my loneliness!  
 I gaze on my heart.

海は眠る。星——  
 星は何處にある。あゝ寂寞！  
 僕は僕の心を見詰める。

Sudden pain of earth  
I hear in the fallen leaf.  
"Life's autumn," I cry.

大地の急な痛みを

僕は落ちる木の葉に聞く。

『生の秋だな』と僕は叫ぶ。

My memory-bird,

To the night's rhythm, soft and sad;—

O ghost, art' not tired?

僕の記憶の鳥が

柔かで悲しい夜の韻律につれて。——

幽霊お前は疲れやせんか？

Lift anchor, life-ship!

Love's red seas, white fancy-birds,  
Behold, and the blue.

生の船、錨を上げよ！

愛戀の赤い海に白い空想の鳥、

見よ——緑の大空を。



## 新佃島閑居之歌

吉井勇

新佃<sup>しんてん</sup>わがたましひの傷つけば堪へがたきまで寂  
しきところ

冬の海じつと見つむる君が目に涙<sup>なみだ</sup>たまれば悲し  
きところ

戀<sup>こひ</sup>すてふ名のみはあれど戀もなくひとり歎けば  
果敢<sup>はか</sup>なきところ

ああ日<sup>ひ</sup>毎<sup>まい</sup>わがうつそみとたましひと相戦へば苦  
しきところ

かくてまた海の鳥にもしたしみぬ世を厭ふ身の  
人も厭<sup>いと</sup>へば

三界がに家なきごとくわれ住めば佃の霜はうつそ  
みに降る

たましひに霜降りそそぐ聲すなりわれなきがら  
といつかなりけむ

ただひとり世をはかなみて住すむときはここも鬼  
界が島かとぞ思ふ

たどひとり海のあなたの滯みほ標しながめてあれと君  
は云ふかや

ただひとり海をながめてあるほどに涙わりなく  
落ちにけるかも

(五年十二月、新佃にて)

## 夜となれば

前田夕暮

夜となれば窓のそとなる冬木立風ゆるごと枝  
 きしみなり

みづからをさいなばこゝろ忽ちにむらむらとし  
 て妻に馳するか

病みたれば心鋭こころするどになりたれば腹いたければ妻  
 よ許しね

## 淀橋煙草工場二首

夕されば煙草工場たばこ工場のはだか灯びのさむざむとして  
 身にしみるかな

冬雨にぬれし瓦の屋根越しに二列にさむき工場の  
 灯ほかけ

こんにやくの熱きを腹にあてにつつ木枯をきく  
 身はひそびそと

冬雨ふゆあめの櫳かきの葉はにふるるその音ねのさながらにして  
 心にふるる

空そらわたる鴉からのむれの鋭とがき啼なきの直ただちに吾われにひび  
 くま近く

しみじみとこのかはたれの雑音ざつおんのなかに横臥わががし  
 身を悔くいにけり

妻つまは厨くに汲くみみおきの水みづの冷ひやたきを總身そうみに感じ皿  
 あらふかも



瓦 焼 き

MITINOKOE  
 SOEKAGAWA  
 AEUDOO □  
 DENZEN □

# 瓦 や く 家

— 亞歐堂の銅版畫の後に —

澤 村 胡 夷

亞歐堂は本名を永田善吉と云ひ、略して田善とよぶ。みちのく須賀川の人なり。洋畫と銅版術とに長じ、文化文政の頃、世に知らる。一七九九年(寛政十一年)長崎に遊び、留まること年あり。異國の風聞など、其國主松平樂翁公に報ぜしが、公は亞米利加獨立戰爭のことをも彼れの書狀によりて知れりと云ふ。一八二二年(文政五年)に歿す。享年七十五。

□

かな版ばんの瓦わやく家いえ  
潤うるむ陽ひの大おほ川かはばたに

さめてまたおちいる夢の  
倦うみはてし煙えんはながし

水岸すゐがんにためいきしつゝ  
かな版はんの瓦やく家……

灰色にかはく異國いこくの  
墨汁すみじゆのほひは悲し

さかつき

收穫

惱める人の慰籍(マックス・エルスカン)

倦怠

林間のほゝるみ

日輪と共に

高原の春

落日

九年後

廣川菽泉

前田春聲

曾野簡治

川路せい子

澤ゆき子

齋藤佳三

秋月露村

松本福督

霜田静志

## さかつき

廣川菽泉

ながらへて此の杯をかへすべきいちにんの子に  
いまだ遭はぬかな

さかづきをこほるる酒のしらたまのしづくを惜  
しみ年こえにけり

思ふことたえだえなれか諸むきになびき寄らな  
む妹はあらぬか

盛りあふれ五つの指をさとぬらす酒は雪よりほ  
のかなるかも

おもひわびまたこりすまに遁れ来てひそかに甜  
むるしらたまの酒

われ立ちてびるまをどりを踊る夜半みぞれふる  
もよさえさえといひて

さえさえと雲ふりふる夜くだちに緋のまひごろ  
もつばらには見し



その弦ひなの遊里竹枝にあはせどもあはせども吾わが  
聲のさみしさ

とりみだし呆ぼれて踊れるむらぎものこころの奥おく  
所がたれしかも見む

すなはちに此のさかづきはかへせども遣やらふか  
たなき身のなけきよな(男)

とりみだし酔へば泣くなる繪だくみの心のそこ  
に觸ふりぬべきかな(女)

## 收 穫

前田春聲

秋の日川岸を辿りし時歌へる詩

深き白ま日の沈し黙まに心恍まけつつ、

秋深き川のほとりをわねは辿りゆけり。

わが魂たまに満ち充つるもの力ぞ、

静かなる川のほとりに輝かひ溢よれぬ。

都を離れ、人を離れ、

われたど一人<sup>ひひとり</sup>心と共に歩みゆく、  
 われたど一人<sup>ひひとり</sup>無人の川岸を辿りゆくなりき。  
 柔らかかに、大らかに、覆へる大地の實<sup>みのり</sup>のみ、  
 枯草の彼方に照り伸ぶる。  
 ああ、地が歌ふ韻律のところに、  
 まことなる心はあまねく生命<sup>いのち</sup>を誘ひつつ。

静かなる心よ。  
 何處<sup>いづこ</sup>まで流れゆかんとすらむ、  
 音なく流れゆく川のおもてに、  
 沈黙<sup>しじま</sup>の耀ひはふりそよぐ、

ああ。孤獨なる胸に溢るるなる、  
 大地の幻にわが心は降りそよぐ。

歩めよ。  
 大らかなる心よ。かぎりなく歩めよ。  
 静かなる秋の川ほとりを。  
 はてなき眼路<sup>めぢ</sup>も何かあらむ。  
 聽けよ。そよくとそよぐ蘆のべに、  
 爾また如何なる私語<sup>さきご</sup>を聽きしならむ。

## 實れる地

秋の實は地に耀き微笑めり。

黄金の陰に、

喜悅の心ぞ燦めきたり、

おお、燃ゆる太陽のすがたよ、

よき收穫の香に没落す。

太陽は沈みゆく。

實り足らへる大らかなる地に、

限りなき夕べぞ輝くなれ。

太陽の没するところ、  
反射す黄金色に。

大地よ。

われ歩みゆく幻の大地よ。

豊なる收穫のよろこび充ちて、

人は收穫の車をやる。

ああ、實れる田園の眺めの中に。

此の喜悅の地のこゝろ。

地に生くるもののがれよ、  
あこがれよ、  
あこがれよ。

長き陰ひく夕べのきはみ、  
實の中にわが生命はみなぎりたり。

獨語 (4)

虐たけられ、悲しみ溢れ、われも亦生くるなり。

若き日よ。わが愛し、愛する人生の想ひは強く、  
蹂躪じられし人間の心になつかしむかな。  
見ずや、此の貧しき胸にも、  
わが眞誠は育たんとするを。

噫。虐たけられし哀れなる人の心よ。

おお。避け難き不幸の翼に打たるる日よ。

此の寂寥の日に、爾の心また何をか思ふぞ、

虐たけられし人間の生活に、

眞なる悲しみと喜びは降りそよぐ。

實に貧しき人間の悲苦を、

我等なほ生くるなり。

大いなる生命に躓づき、又、堪えつつ、

今日も、明日も、永劫に、永劫に、

我等負擔を生活せん。

ああ。わが生活の日よ。我等が生活の日よ。

虐たけられ、蹂躪じられ、なほ純潔なる者よ。

爾が心よ。爾さびしき心よ。

爾また生くる日に。

悩める人の慰藉(マクス・エルスカン)

曾野簡治譯

把れよとて冬がさよけし彼れの手を  
われとりぬ、わが手のなかに。

わが脳にははるかなる、

古き苦熱の夏の耀き、

わが眼にはかくも眞白く

幕と被ふ寛き簾直

また見るはシシルの島人  
うちつゞくシシルの島々、

そはいさゝかの遍歴の旅  
捨つるにはあまりに疾き――

人の逝くあらゆる邦へ

船はゆく海のかぎりを、時のかぎりを、

けにわが航海ぞ暴風の旅路、  
船にはしつらふ白き寢床。

帆のめぐりには波をうつ  
星のまたよき。

かくてわれは味ひき、わが唇に海の香を  
いと苦き麥芽の如き海の香を、

また飲みぬ、居酒屋に語り合ふ  
凶暴の酔人のため盃を。

かくてわれわがゆく邦をのぞむなり、  
 そは疆知らぬ雪の邦……

雪よはけしくつむなかれ、  
 マリヤこそこよなき被覆。

熱に病む白き寢床に手をおきて  
 いまはばや兎のごとくは走らざらむ。

## 倦怠

川路せい子

夕靄の底遠く  
 幻の街は沈みて  
 燃えぬ太陽の煙りは空に  
 はて遠き心になびく。

肌<sup>はだ</sup>にいたき死の風は  
 素裸<sup>すはだか</sup>の並木をすぎて

悲しみの心の内を吹きめぐる。

眼を閉ぢて思ふ心を搔きさぐる

暮れ方の聲なきどよみ、

久しき悩みに心疲れ

つきせぬ望みにも倦みはてたり。

われ知りそめし生のうれひよ、

あゝ戀も果つる日はあり、

薔薇色の煙りにむせて

むなしき歌のみ我れは繰り返す。

### 林間のほゝゑみ

澤ゆき子

静かな優しさをも

たゝえてゆく風の青み、

美しい日中に動かされ、いきづいてる池のお

もてより

ゆるやかな眠にひたる心の輝やかしさ。

声もなく、どこよりかゆるゝつかれ、

青くひとり冴ゆる木の葉の光の如く



微笑ほほえみはまるやかなさみしみに、  
とりとめなくいきづく。

ほのかな色あひの中に滴さくたる叫さけひ、  
ふかい優しみに、ひたる酔よひごち、

われは花をふみしめる刹那せつなの優しい肌はだの夢に、  
たゞしつくりと抱かれたき

眠をゆるゆる風の中に、

そゝられる身のほとりの柔かい光に……。

### 孤獨と海の戀

悲しまれた月日よ。

蒼い銀光ぎんこうに大きい砂地がひらめく時、

おほえない夢のこゝろが、

身をぬらすやうにあたりひそむ。

あゝくひとり身の胸の中のやはらかさは、

乳色のなつかしいうるほひ……

なぐさめ難くとも、

せめて慰め難くとも、

みたしてゆくことに甘へしめよ。

口添へをする時の頬のやうな、

悲しい海の青み。

悩ましき潮ざいにまじる海女の哀歌、

きれふの吐息よ。

吾は優しきものにいざなはれ、

何ものもとがめ得ぬかよわさに心を悩ましつ、

ねむられぬ潮ざいと、悲しい終夜と、

そして孤獨。

あゝく、總身に泌み渡る花のあふれた匂を……

とても云はずにゐられないやうなものゝ感じかた、

むしろ自由に歌ひ出でん

愛には争もする無邪氣さに……。

壯健にみちて輝く海女の歌聲へ、

私の終夜はゆれてゆく。

## 日輪と共に

齋藤佳三

生れ出でよ、  
 年と共に、彼の<sup>か</sup>日輪と共に生れ出でよ。  
 敏く<sup>きた</sup>育ちて、など斯くも目醒めざるや、  
 生きざるや、  
 我がいとしき人類よ。  
 時は去りぬ、  
 愚なる者の<sup>うしろ</sup>後を厳しく笑ひて時は去り行く。  
 生れ出でよ。

生れ出でよ。  
 年と共に彼の日輪と共に生れ出でよ。  
 我等は寔<sup>まこと</sup>に生れ出づるために生れ出でたるなり。

## 高原の春

秋月露村

野も山も春は尊し若芽はつはついのち生命光れり彌生  
大空。

春の日の光りをあみて野中道つながれてゆく駒  
をしぞおもふ。

つながれしまゝに尾をふり嘶きつ馬あよむかも  
微風かぜに吹かれつ。

高原の青草の匂ひほのほのと駒を見つゝも白樺  
に凭る。

若駒は春のひかりに身ぶるひつ青草はみて嘶け  
るかも。

草をはみ喰みては嘶き若駒はあ登音のこたうたうおど  
りやますも。

駒ひとり走りいづれば駒あまたつときて走る高  
原の春。

若駒のおどりやまねば吾もまた躍りて見たかり  
春のひかりに。

\* \* \* \* \*

尾崎行輝氏はじめて北陸の空に飛ぶ

飛行機の今か來らしと妻よびつ家根にのほりて  
見やる蒼空。

目路はるか機體ほつちり見えそめぬ、あなやと心  
おどらせにけり。

しんしんと陽はふりやまず家根の上に日傘かざ  
しつ娘立てるも。

天あまかける飛行男は楽しくも悲しからまし命こめ  
て飛ぶ。

秋ずめるみ空飛びゆくプロペラのかそけき音を  
淋しみにけり。

## 落日

松本福督

ひとりなればひたにかなしく入りつ陽ひを合掌し  
てあり秋風のなか。

あをあをと光りつらなる菜畑なばたけにひつそりとして  
鶏けいひとつみゆ。

終日の労働にやせしかり馬は暗きうまやに首を  
ふるなり。

山鴉立ち枯れの杜にとぶときはひとり木の實を  
ひらひけるかも。

われひとり隅つこの椅子いすにうづくまり酒をまつ  
なり夕かれひどき。

小さなる貨車の小窓に疲れたる牛の顔らが夕陽ゆづりひ  
みつむる。

こころよく君とわかれぬゆきちがふ冬雲のむれ  
の如くあはかり。

初冬の入日けぶれる栗林男むくちにわが前をゆ  
く。

身をおこしまた忍びかにさびしがる落葉林を歩  
みつづけぬ。

砂丘の砂にはらばひ砂にぎりわが淋しさをむさ

ほりてみる。

### 九年後

霜田静志

思ひ出で、めづる心の寂しさの今日も静にひと  
り歩める。

あひどきの夜もほのかなる薄月うすつき夜限りの果てに  
思ふわが戀。

忍ぶ身のわれ等が上の宵暗にいつしか白む薄月  
夜かな。

月いつか雲間くもまに入りてうす情心にかゝり別れか

ねつも。  
 わが心何なればかくは物さびて命の果てを戀ひ  
 渡るらむ。  
 美しき夢を追ひ行く憔悴の身を顧みて泣かれぬ  
 るかな  
 君を追ふ心悲しく亂れ來し果てなき跡を如何に  
 すべけむ。

あまたなる  
 夜光  
 夜に入る  
 おお雪降る  
 秋風  
 青き夢  
 戀の屍  
 耕田作  
 二人はゆ  
 小曲  
 いと  
 雪と  
 初春

平戸 廉吉  
 會野 簡治  
 山崎 やすを  
 朱耀 翰  
 淺田 眞佐子  
 藤井 月泉  
 清水 浮鳥  
 窪田 照子  
 倉石 ちか良  
 大澤 歌朗  
 正井 謙二  
 三幡 よし夫  
 北山 哲平  
 藤井 五郎雄

## あまたなる扉

平戸廉吉

わが暗き森のかなたに  
 かすあまたならべる扉  
 きざはしをのほりあぐみて  
 たちまよふかのもこのもに  
 夕月はかなしくさをそふ。

吾はとくしとしとと榛皮の小徑を  
 浮動する夢の廊下を

扁舟流るゝ葦のしけみを  
 行きつまたかへりつ  
 あまたなる扉の前に鍵もなくたゞづみつくす。

## 世界のはてへ

時たま起る奇しき願ひ  
 されど氣持よき血と流れて胸へ  
 「世界のはてへ」といふ願ひ

世界のはてへ  
 反抗ふ人の死骸を越えて



銀を湛えた平野の流れを  
 そしてあの山越えて谷越えて  
 私は何處へ行くだらう  
 時たま起る世界のはてへ！

青のひびき

秋の日は

糸の空氣の咽び泣く  
 平オロンの顫音  
 紺青の思のそら

淡青き薄荷酒の記憶

きしむ骨と肉

そのいたみ

そして終の幕に微笑む戀人のかけ。

夜光蟲

曾野簡治

身をめぐるもの

たへざる音楽、

いらしかるな色調と匂ひの

断ちがたき縛を胸に置かれたり――

巻煙草のけむり室にうづまき満ち

窓の外にはあらし。

われら覺めたれば

闇に逆まく濁流にも

おし流さるゝことなく

さゝやかなれど一と息ごとにきはやかな

夜光蟲の光をはなつ。

さはれ濁流の澎湃は

わがゆく所、食卓に寢床に

わが園におしよせたり。

まことの光り

蛇の尾のするどさ

その頭の大きく鋭く三角形に愈々とがれる

その舌の呪咀のまことはけしき

その鱗の電気魔力の逞しき

その斑は毒瓦斯の火柱、赤く燃へたり。

すべてのものが持つ毒池

汽車、飛行機、軍艦、兵器、科學の火の塔  
われらの推すにも引くにも泣くにも行くにも  
残忍のたへざるのろひ。

すべてのものに残忍はある  
夜ごとにつどふ魂の忍びゆきにさへ  
はた聖者の教訓にも  
かすかな残忍の敏感な觸手はある。  
すべての残忍の大きな渦のなかに  
この覺めたる刹那のまことのわれの雜らぬ光り。

## 夜に入る都

山崎やすを

ゆめ見ごとち音もなく  
今ぞ垂れくる黄昏のむねの上  
和みて美しきその魂はこほれ、  
灯ぞ街々に輝き出でぬ。香はしく、また、  
しづかなる喜びに濕めりたり。

巷のどよみ、衣すれの  
縫れにほひと薰り捲き、  
輝きのこる西空の、うすらぬくみに

淡くとけゆくときめき。  
 灯よ、ほのかなるゑひごゝろ  
 つゝましき笑をも點じたる。

笑めり、灯は、  
 懺悔のあとの心のごとく  
 明るき涙を透きてあでやかに  
 花やぐ微笑——たそがれは  
 犇と抱き締む。——喜びも悲しみも  
 胸のさびしさひきいでゝ  
 戀人のごと放たじと。

お 春

朱 耀 翰

雪の國に住む娘なりき。  
 落葉松の深林にひそまり照らす  
 黄ばむ冬日に、淡き雪はつもり——  
 機織る娘は歌ふなり、涙の歌。

金の十字の菜の花の亂れ咲く頃、  
 さみだれは夢のしらべにおとなふ日——  
 彼女は高原の家に生れ出でぬ。

「お春よ」と父は朝な夕な汝が名を呼ぶ。

さはあれ春はゆきへかり、いつか五たび  
 幻しの運命ぞ母を奪ひし、  
 影さむしき秋の日のにほひに  
 はた織る娘は歌ふなり、涙の歌。

たゞひとりの父こそ汝が友なれ

高原の巖にふたり起き伏し――

娘の手握りしめ――娘ゆゑ

「お春よ」と父は朝な夕な汝が名を呼ぶ。

山の斜面は夕べ近く

牝鹿の歌はもつれゆく。

あゝお春も女にてありし、その血潮――

燃えつゝ、轟きつゝ流れゆく。

求むる心の燃ゆれども

めじかの鳴く音は止む日なく、

父をし思へば胸血しづめて

機をる娘は歌ふなり、涙の歌。

## 雪降る夜

浅田真佐子

熱からさめた病人の頭のやうに、  
果敢なくわびしい夜が来た、  
アンチピリンの細い粉末、  
疲れて青い雪が降る――。

圍廬裡にあたる土間の爺よ、

お前は何に咒はれて、

こくりくくと暗い居睡り、

背をかゝめて、

『冬』を背負つて、

さて何を待つ――。

外にはどつと暗い雪崩の音――。

雪が降る、雪が降る――。

煤けた棚の青い瓶、

何やらひそむその蔭の、

ほんのり暗い土間の隅、

滅入る焚火に一つ走つた赤い舌、

外には暗い雪が降る。

## 秋 風

藤井月泉

青き

剃あとに

ひいやり

風の口づけ

秋毛

とんがり

人の心に

深く巣くひて

殺戮を

弄ぶ

あはれ秋風。

師 走

芝居のびらに

風の穂はゆれ

壓し來る

雲の吐息に

野の鳥ら

ひしと羽を抱き

ものうき師走の空に

両手をのばし

虚空を打てば

わが胸には  
さみしき反響こだまのみ。

青き夢

清水浮鳥

悲しきは  
秋の夜の川霧が生む  
青き夢

われは知る  
その夢にあこがれて  
ひとりぬけいでし

魂の  
もつとりと濡れて  
さまよひ歩きしこと、

また知る  
その魂の  
さまよひ疲れて  
ふたよび  
淋しきわれに歸り來りしこと。

月夜低唱



雲にかどはかされし  
月はまほろし

青白き光り

狂女のさよやき

遠く近く遠く

すべては

夢のなか

いづくともなく漂ふ

甘き成熟の匂ひ

木の實の落つる音

そのあとに敷く瑠璃紺の夢

夏の夜の青空。

## 戀の屍

窪田照子

わが心は

暗き穴を流るゝ水のせよらぎ  
紛碎されし瑪瑙の玉。

わが心は亡びゆく日の光り無き銅色  
 雪さへ舞ふ中に  
 さゝぐるものもなき祭壇

わが夢をしてしばし  
 薔薇の花蔭に休ましめよ  
 残る香ひにのみ戀は包まむ。

不淨の叫び

いたましき血の戦場  
 傷痕と苦悶との過去を追ふなかれ、

すべての終點

冬の氷雨の槍

碎かれし瑪瑙の光り

葬れよ薔薇の花蔭に  
 ただのこる匂ひのみ  
 われを温むれば。

耕作

倉石ちか良

かなしき手つき足つきして

われたがやしぬ  
 桑の畑。  
 灰色の土に  
 秋の氣みちて  
 くろくくろく黙す、  
 その中に  
 白きくものえきあり  
 ふはふはと  
 ひくき空に  
 たちのほる。

二人は行く

大澤歌郎

眞白な雲の  
 不思議なる形かたち  
 秋の空はいとたかく  
 雲のこゝろはいと尊ふとし。

すさんだ一すぢの線路を  
 若き二人は行く、  
 總てを望み總てに憬あこが憧がれつゝ

二つのレールのやうに  
 またはほとりの枯れはてた草のやうに、  
 寂しき思に  
 二人は行く、

かぎりなく廣い空に  
 よどみなく流れた白雲  
 それを仰ぎ見て二人は行く  
 奥深くひそむ或る物を見出さんと  
 やがて二人は  
 「御空に住む愛の神よ」

眞實の若き人を救はれよ………」と叫ぶ

二人は行く  
 うら淋しき二つの線路を  
 總てを望み 總てに憧憬れつゝ。

### 小 曲

正井謙二

歩むともなく  
 地上を歩む我。  
 ふむとなく  
 ふみたる

悲しき草。

思ひ出の稻

さえわたる月、

さみしき微笑。

たどるともなき、

細き畦道。

ながれ

青い草の生えた堤を持つた清いながれよ。

私は今その草の上に寝ころんでゐる。

ながれはゆるく走りながら、

永久につづく、

永劫の力を持つて

ながれを汲んで戯れた幼時も、

あどけない少年の時も、

いやまた今でも私はこの堤を離れることは出来ない。

その草叢はながく、

私の草叢となるであらう。

そしてその流れと草叢は永劫に離れぬであらう。

## いとなみ

三幡よし夫

南の丘に金牛星のきらめく時

水車場の若主人ペイチヤは

牛小屋へ芻草をきりに行く。

蛋白石のやうに東が黄ばんだ時

足下が見えだしたから濱へ下らうと

ペイチヤは牛車に麥粉を積みに行く。

天心で太陽が雲で頸をなでる時

麥粉を積んだ船は帆を上げペイチヤは

牛車に今宵粉に春く麥を積む。

やがて夕暮ペイチヤの女房さんはきて

食事のしらせに愛想よく

今日の麥は春けが易いのねと

粉まむれのペイチヤと瞳を合はす。

雪景

北山哲平

ゆきがらす  
 ゆきがらす  
 たまゆらの黒き陰影ひき  
 雪の上  
 白む陽斜めに  
 熟睡む樹林の夢をうかぶ。  
 文身のあと紫にかけり  
 かなしく  
 さんらんとひかる雪肌 (二九一六・二二)

初春

藤井五郎雄

小さな白金の光り  
 軒に落ちる  
 藁打つ槌の音  
 どこからとなき  
 響きのやはらかさ、  
 娘の唇のなまめき、  
 向ふの川原の  
 柳は青くなる。

雪影集

霜	病	肌	う	秋	鴉	夕	微	冬	青	金	斑
			つ	の						色	ら
の	む		け	さ			木			の	の
			や	ゝ						富	
朝	冬	寒	心	き	雲	温	立	空	士	雪	

橋	三	廣	正	石	滑	大	淺	大	吉	渡	北
本	幡	田	井	渡	川	鳥	田	澤	村	井	山
	よ	英					真	忠	久	春	哲
八	し	之	謙	白	義	武	佐	一	雄	雄	平
郎		助	二	映	彦	男	子	郎			



## 斑らの雪

北山哲平

あき空のまなかはるかに陽の暈をさみしと獨り  
 仰ぎけるかも。  
 けさ降りし雪は斑らに消えのこり大根をぬけば  
 寒くもあるかな。  
 ひもじくて温き冬日に蕃茄をだんまりて我が貪  
 りやまず。  
 窓の外に冬ざれの野にくだかけのとさかはただ  
 にあかかりしかも。  
 ひもじさの腹をあたため吹雪する夜をひたすら

にねむるなりけり。  
 額のおせぬぐひてやがて唐黍の粒をがつちりか  
 みにけるかも。  
 雪の上に白む陽よわしかた蔭に貧血の子のつく  
 息かなし。  
 ひんぶんとけさ降る雪をわたりくる櫓の鈴音を  
 きけばうれしも。

## 金色の富士

渡井春雄

危うけに葉をさゝえたる木の間より金色の富士

光りてゐたり  
 きのふ死にし小兎の箱は悲しくも朝のひなたに  
 なけだされあり  
 我れをくひし蚊をうちころせば我れの血の手に  
 つきたるもなつかしきかな  
 電線にさがりふららと首をふる糸爪ゆるがし秋  
 の風ふく  
 犬のあとつけて飛び入る芒原芒なびかひ顔に痛  
 かり

## 青空

吉村久雄

訪ひもせず訪はれもせざる安らかさされどあま  
 りに寂しかりけり  
 もろこしの葉擦れの音のまづ起り我が頬を吹く  
 秋の風かな  
 狂ほしく河原の石を投げ込みぬ多摩の川水おど  
 ろき行くも  
 あまりよく晴れわたりたる空なれば歌作り得ず  
 太陽をたふかな。  
 さるすべり梢の間より青き空茫然として見つめ

けるかも  
 大富士はくぬぎ林をすべり行き杉の林にとどま  
 りしかも  
 (瀛車中にて)  
 思ふこといささかもなし迎りゆく乙女峠の枯す  
 すきかな  
 (乙女峠にて)

## 冬木立

大澤忠一郎

草ほうき立てたる如くほうけたり冬木のむれも  
 われの心も  
 川面を滑りて響く櫓の音も松前節も今日は悲し

き  
 真夜中に靴の音こそ身にひどくひとりし聞けば  
 身の病ましきよ  
 一面に白光る水田かそけくも蛙とび入りさむき  
 星の夜  
 ふたゝびはかへれぬものか幼児がなだめてもな  
 ほ泣きやまぬ心に

## 微温

浅田真佐子

冬の日の生温かき静けさにピョと目白はないて

見たるか  
 温かき冬の日つゞき鉢の中の黒き土にも春甦る  
 らし  
 日を逐ふて明日をねがひぬかくてわれ足るはえ  
 知らず老るて行くかも  
 浦里のかたく結びし唇もいたまし雪はちりぢり  
 と降る  
 浦里は雪の上にもたゞひとり可愛い男をおもひ  
 つゞけぬ  
 月青く見越しの松の雪にさゆ時次郎こそかなし  
 からまし

黎明はしぬびしぬべどわが閨室の外のものに迷ひ  
 入りもえせぬか  
 しづかなる寢覺ごころよ黎明は君が額にほのか  
 なるかも  
 繼ぎしたる足袋穿かすとして母君は嫁もつわれの  
 足をとらすも  
 美しき人の交れば殊更にそしらぬ振りもして見  
 たるかも

夕雲

大島武男

俘虜一人收容所の窓により夕雲ながめいたりけ  
 るかも  
 高らかに故國の歌など唄へるか五人の俘虜の若  
 き腫よ  
 さはやかに木履の鈴を響かせて過ぎし舞妓のな  
 つかしきかな  
 水も空も澄み渡りたる秋なれば只我一人の少さ  
 くもあるかな

鴉

滑川義彦

血の海の沸き立つ朝にまさびしく雲に漂ふ一羽  
 の鴉  
 喙木鳥は淋しき鳥よ裸木をほとほと啄るたり  
 けるかも

秋のさゝやき

石渡白映

ゆきつきてまた入る林まばらにも落葉ししきる  
 秋深みかも

あかつきの風さはさはと肌にしむ朝晴れぞらを  
 百舌鳥の啼きける  
 今日もまた曙晴れて百舌鳥啼けば日和定まる秋  
 にもあるかな  
 眞赤なる柿ある家は我が家とどこでも見えてう  
 れしかりけり

## うつけ心

正井謙二

書く手やめいつかうつけて窓の外の外のユーカリに  
 見入る教室のひる

堀端に君と語ればみずどりの夕日を受けてさび  
 しかりけり  
 眼鏡つけ新聞讀める門衛の老いたる顔に冬の日  
 さびし  
 枕もとに散る白菊の一つびとつかぞえて友はつ  
 かれ伏しけり  
 言葉尻いやに強くも語る友頬のえくほもさみし  
 かりけり  
 人込みに押しつ押されつ夕日あび稽古相撲をな  
 がめけるかも  
 名も知らぬ相撲取りにも力みたる心をかしく立

ちすくみけり

肌寒

廣田英之助

をかしきは西瓜の皮に彫られたる鶏のつゝきし  
 あなのかずかず  
 こゝろよき蓮のほひに浸り居て死なましとお  
 もふ朝あけの頃  
 なにの蟲あかつき近くあえかなる人のおもひに  
 ふれて啼けるは  
 戸を繰れば田の面にうすく霧立ちて遠音にきこ

ゆゑ車のとどろき  
 肌さむく腹すく頃となりにけり浅草あたり屋臺  
 店おもほゆ

病める冬

三幡よし夫

あはれなる戀のおほりをおもひつゝありのすさ  
 びを巷に追ふも  
 はしけやし君病みたまひ哀れそふふるごとめき  
 て落つる木葉こはに  
 空みつゝ青草原にねころべば天は青かりさてか

なしかり  
 ぐつたりと疲れし瞳みはるとき八ツ手のひろ葉  
 いたくも青し  
 おもひわび戀かあらぬと空あふぐ空はまつかに  
 夕日照らすも  
 あやしくもとくより知れる君なるに心おびゆる  
 われなりしかな  
 桐の樹のさびしく見ゆる窓ぎはにたばこふかす  
 も冬なればうし

## 霜の朝

橋本八郎

うれしもよ霜白々と此朝晴齒みかくわれはすこ  
 やかにあり  
 れいらうと霜にかゞやく朝日かけまことよき日  
 ぞ雀木になく  
 霜どけの家根のかはかすれいらうと日にかぎろ  
 ひて静かなりけり  
 野のはてにつゞく山脈ヤマノセはろばろと心かなしく吾  
 れ一人ゆく



目要輯前奏伴

秋夜の蔭(詩)  
 G. K. Chesterton 外二篇(英詩)  
 冷い夕飯(詩)  
 山上獨語(短歌)  
 心(詩)  
 ゴルスワアジイの詩(譯詩)  
 靈の日輪基督(翻譯)  
 象徵主義及象徵詩派(翻譯)  
 「想」の序曲その他(詩)

三木露風  
 野口米次郎  
 與謝野晶子  
 吉井勇  
 富田碎花  
 山宮允  
 灰野庄平  
 川路柳虹  
 川路柳虹

消

詩集 月に吠える

萩原朔太郎氏著 感情詩社

詩集 轉身の頌

日夏耿之助氏著 詩人發行所

息

同氏の第一詩集思案の轉機に臨むて出したもの、長谷川潔氏の裝禱で現はれる、豫約を以て志望者に頒つとの事、申込は四谷區北伊賀町十七「詩人發行所 定價金貳圓」

象徵主義及象徵詩派 (ルネ・ギル)

雪の小唄

雪 (ハゲルモン)

雪はふりつむ (エロール)

食後の卓 (斷片)

川路柳虹

長谷川潔氏の裝禱 (ルネ・ギル)

## 象徴主義及象徴詩派（承前）

— RENÉ GHIL —

マラルメの傍には二人の新しい詩人が輩出した。即ちエミール・ヴェルハアレン Emil Verhaeren とフランシス・ギエレグリフィン Francis Vielé-Griffin とである。この二人の詩人は象徴派詩人の中でも最も力強い詩人であるがギエレグリフィンはわけても最個人性に富んだ詩人である。

アンリ・ド・レニエ Henri de Régnier は感傷的な優麗な詩風をもつて千八百八十五年に現はれた。彼はやがてマラルメの詩風を摸し、優雅な憂鬱的な華麗な内容を盛るに純粹正確な平仄を以てし、そこへ確實な象徴の教義を取り入れた。それと彼はカアンやグリフィンの手法に従つて自由詩をとり入れた處もあ

るがそれは寧ろ彼の詩をして唯放膽な形式に入らしめたと云ふに止つてゐる。何となれば彼の技巧は夫れとは全く反對な、むしろ高踏派 パルナッス Parnasse に近いものであるからである。即ち彼は近代の精神とは相容れないものを有してゐるのでその詩集『古代傳奇詩集』ボエトリアンシエロマン に於ても見る如く自ら古代に媚びてゐるのである。

千八百八十七年ギユスタヴ・カアン氏は『自由詩』Vers Libre と稱する名目の下に彼が詩論を再録し且つそを實證した詩の第一集を上梓した。このものは象徴主義の詩學を最も確實に又最も普遍的に攝取した處のものではあつたが未だ自發的に個的なものと云ふ事は斷言し得ないのである。

彼が詩論は繼いで千八百八十八年『獨立評論』ラレビユリアンパデン 誌上に掲げられたがこのものに關してヴァン・ベエ氏 Van Bever 並にポール・レオトオ氏 Paul Léautaud は

その共著にかゝる詞華集フレトロジに於てカアン氏のために注告してゐる處に據るとカアン氏の企てたこの自由詩はその主張に於て既にジュウル・ラフオルグ Jule Lfaorgue が企てた處のものであると云ふにある。そしてこの病的な詩人はまた自ら奇聳イロニクの風格を有する冷情不羈の詩人トリスタン・コルビエール Tristan Corbière の感性に負ふ處至大であつた事も書かれてゐる。で、カアン氏は遂に千八百九十七年第一集の再版に際してその序文にこの事を記し自説を改訂したのであつた。

越えて恰度千八百八十五年の末つ方カアン氏はアルゼリアから巴里へ四年の旅を終へて歸つてきて發表した詩が數篇あるが、これらはすべて古典的アレキな十二綴音詩サンドラでしかも全く豫想に反した單調なものであつた。たゞその中のわづか一二篇が彼の友人たるジュール・ラフオルグの未發表の詩の風格を踏襲してゐた

事である。

彼はかくて散文詩の方面に興味を有つたやうに思はれる。

併し彼がかの名高いデュール・ユレー氏の『質疑』に答へた處に據ると彼の詩論は普遍的な態度の中にあつてその明々白々の論點は偶々予の千八百八十五年以來固執する『言語の器樂的構成論』の詩的精神に負ふ處あるを見るのである。即ち『器樂的構成論』の提言に關する反響としての適例はカアン氏の自由詩論に於て明かである。曰く『自由詩は母韻とその血族たる子韻との重韻法アリテラシオンに依つてのみ存立する』と。これ即ち予の提唱にかゝる聲音法タンフルヴォワ Timbres-Vocaux に由來する事を示すものではないか。且つ曰く『章句に於ける自發的思想の推移は一つの詩に於ける句から句へ最個的な且つ至上な『詩』ポエムを植へ付けるものである』と。予は更に多くを實驗してゐる。詩集全卷に渡つて思想推移の經過

は見えねばならない。詩集から詩集へ、更にあらゆる製作に渡つてその推移は見えねばならない——ことを予は實證してゐる。彼は疑ひもなく『言語の器樂的構成論』から出立してそれを半音と四分の一音の豫覺から不可能にも全音階に到達せんことを揚語したのである。

けれども吾人が一個の統合體として維持して來た<sup>アレキサンドラン</sup>十二綴音詩の詩形を碎裂し削分することはこれ皆一個の韻律的醇化 *Une é voluante Rythmique* を創造せんがためである。

他なし、カアン氏の製作たる『自由詩』<sup>ツェルリッツ</sup>てふ詩は繼いで現はれたギエレ・グリフィン氏の言ふ『律的動力と最正確にして且つ持續的なる調和ある』詩なのである。カアン氏並びにアルベール・モツケル *Albert Mockel* 氏の詩に望んだところのものも又夫れである。

かくのごとく言葉は可成り上手に語られてはゐるが抑もこの理論たるや一定の平仄ある詩に於ても、また、同じ長さで發音さるゝ語數に依然として憑據する古律に於ても猶ほ且つ見らるゝ所のものなのである。たゞかくの如く揚言された詩學を以てカアン氏は専心ベック・ド・フウキエールの研究を極端まで遂行したものである。即ち音調の『遲速の度合』“*accélérations et les retards*”を更に複雑に且つ微妙に追究したものである。且つそのものが詩の中に採用し得らるゝことを言つたのである。けれどもそこに矛盾が存してゐる。それは前にも屢々論じた事だが同一の長さ(同じ語數)を有つた二つの詩句は決して同じき持續 *même durée* ではないといふ事である。そこで少しく以前の論議に立ちかへらう。

カアン氏は<sup>アレクサンドラン</sup>十二綴音詩本來の語數を碎裂する事をやり乍ら他の方面では韻律

的に明確な不決定を創設したのである。モツケル氏も亦これと同じである。

抑も予がいふ『象徴主義』の蹉跌として數ふべきそれ——感覺上にも、また新しき、或は普遍的な意義に於ても、人生上の問題に就いても、象徴主義の缺點として擧ぐべきそれらは如何なるものであらう。

予の見る處を以てすればそれらは象徴詩派のいづれの部分に於ても立論確證しうらと思ふのである。第一はその思想の格摯さるゝ處に何ら音樂的韻律的追究のないといふことに於ても見られる。また象徴詩派の詩學とも言語學の研究解説とも稱すべき彼らの詩篇に就いて見ればよくわかる。——而てこの研究は自らヴェルハアレンとギエレ・グリフインの上に落ちるのである。

吾々とは凡そ十年の相違ある先輩として——やがて吾々も相遇すべきことで

はあるが——エミール・ヴェルハアレン氏は既に千八百八十三年と千八百八十六年とに二冊の詩集を刊行してゐる。その第一集は何ら特異な直觀の表現もないがその第二集に至つてはやゝ詩壇の一大運動の發生を豫期さすものがあつた。爾來ヴェルハアレンの詩は粗野な力強い氣稟を示すに至つた。而して更に彼が行く道を探究するならば彼には深刻な、遺傳的素質とも見らるべき、吾人の想像だも及ばぬ総合的な神祕的驚異に依つて輝いた自然の勇健な幻想ギジョンがある。而して言葉は奔放な律動に依つて表はされ乍ら沈靜な反響で重くされてゐる。これ恐らくヴェルハアレンの豪宕な資質の二方面であらう。

この本質的な情緒は後に至つて彼のあらゆる作物に表はれてゐるアトモスフェアアルユ幻覺的零圍氣ウシキ、即ち hallucinante といふ言葉で現はされてゐるやうな状態のものである。即ち最も近代的な且つ生々した動的なものを喚起せしめるものである。而して

彼の技巧たるや一面奔放ロマンチックであると同時に一面綜合サンテチック的である。かゝる廣濶な素質を以て彼の第一收穫は彼の詩的稟質に聚りくるあらゆる反響を調和せしめたのであらう。(次輯完結)

## 雪の小唄

雪 (ルミ・ド・ケルモン)

いもおん、雪はそなたの頸のどのよに白い、  
いもおん、雪はそなたの膝ひざのよに白い。

いもおん、そなたの手ては雪のよに冷つめたい、  
いもおん、そなたの胸むねは雪のよに冷つめたい。

雪は焔ほの接吻キスでなら解とける、  
そなたの胸むねは別れわかれの時の接吻キスでなら解とける。

雪は小松の小枝でなけく、  
そなたの額は栗毛の髪にかくれてなけく。

いもおん、お庭の中で、汝の妹の雪はねてる、  
いもおん、そなたはほんに私の雪ぢや、戀ぢや。

雪はふりつむ……(ファルガナン・エロール)

雪はふりつむ地の上に、  
闇はふりつむ地の上に。

枯葉はどこへ行つたやら、  
枯れた葉さへも見あたらぬ、  
雪はふりつむ暗はふりつむ。

悪い鬼めが錆び斧片手に、  
戸をばたくとよそでの噂。  
ちつと唄へて待ちませう。

あれさ向ふに一すぢ、悲しの雲め——  
暗い墓場か、閉じた家は、  
どこもかしこも雪がふる、闇がふる。

## 食後の卓

—これからこゝで種々なことを諸君と語りたい。

去年の後半期から一般に詩壇が活氣づいて來た。その原因はむろん種々な詩社の創設された事専門の詩の冊誌の増えた事——「伴奏」もその一つだが——詩論の熾んにならんとしてきた事など數へ挙げれば種々あらうが歸する處詩歌の時機が廻つて來たのだと思ふ。來なくてはならぬ時がきたのだと思ふ。行き詰りに詰つた上旬、寂寥に寂寥を重ねた上旬一隅から旋風が動搖し出した。極まれば還へる道理で詩がいよゝゝこれから汪然とした勢力で新しい王國を建設する時に際したのだと思ふ。何しろ喜ばしい傾向である。喜ばしい杯を舉げてこの多幸な「新しき年」を諸君と共に祝さうと思ふ。

『伴奏』の第一輯は意外に諸方から賞讃の辭を給はつた。そしてその賞讃が單純な御世辭でなく自分の事業、自分の努力を買つて下すつた事から出てゐるのを何より快く感じた。自分は出来る丈けの事をしてこれらの賞讃に酬いたく思ふ。社會から見れば、文壇

から見れば少い刊行物かも知れないが『伴奏』が齎らす効果は私たちの良い靈の所産だといふ事を明らかにする時機がやがては來ると思ふ。忍従に忍従を重ねて積み重ねよう。失望しまい。私たちはいつも種を播き土を培ふ耕人であつていいのだ。

曙光詩社はこれから種々な事をやりたい。詩に關する種々な良い出版もやりたいし、詩の講演會詩談會なども時々したい。詩談會は既に本月十四日「感情」「詩人」並びに本詩社同人とでやつたが、この會合は主として今迄離れゝゝになつてた吾々詩壇の連中が一堂に集まつて語り合ひそれによつて互ひの感情的齟齬は融解し、各の所信は明らかにし、そして各自の道を尊重する様な基礎を作る爲めの會合であるので純然たる曙光詩社の會ではないが吾々丈けの會合を時々やり度く思つてゐる。これは其の節御通知するが最近は今月末か來月上旬に實行したく思つてゐる。在京並びに近縣の社友諸氏と顔を合はす事が出来れば夫れ丈けでも大きい幸福であらうと思ふ。講演會はこの三四月の候に是非やりたいと今から計畫してゐる。そして詩壇の諸名士の講演と共に樂壇の諸家にも出席して頂いて詩と音樂との提携も計り度く思つてゐる。以前この種の會合が無かつたではないがまだ何の効果も舉げない中に終つて終つた。最も親しい姉妹であるべき詩と



音楽が互に離隔してゐる事は相互の發達に損なわけである。殊に詩歌の民衆的發達を企劃する上には是非とも音楽の力を借る必要がある。この意味に於て吾々の歌謡を知名な作曲家に提供して作曲して頂き度く思つてゐる。既に山田耕作小松玉巖諸氏の手によつて詩壇諸家の一二の創作は立派な作曲となつてゐるものがあるから出來ればさういふものゝ發表もその席に願はうと思つてゐる。また永らく忘られた詩の朗讀についても多少の研究を加へて一般的なものにする基礎も作りたく思つてゐる。「カチューシャの唄」より知らない世間にもつと良し民謡や詩を教へる事は社會公共の爲めにも必要であらうと存じる。

\*

ヴェルハアレンが亡くなつた。外電の報ずる處によると客年十一月廿七日ルーアンで滅亡に瀕せる白耳義のために講演して巴里への歸途汽車の軌道に觸れて轢死したのだといふ。一時マアテルリンクの死の虚報もあつた此節の外電だから一圖に信ずる事もなるまいが虚報らしい戦死とか名譽の負傷とか云ふ報道でない丈け眞に近いように思はれる。實に哀惜に堪へない事である。私は彼の功績を繪畫に於けるセザンヌ彫塑に於けるロダンと共に近代詩歌の王として認めてゐる。恐らくこの事に就いては世界共通の悲嘆を有

つであらうが現在の私が最も彼の詩風を渴仰し推服してゐる丈けその哀しみも又大きい。彼は私に取つてほんとの *grand maître* だ。既に山宮君等の「詩人」に依つて追悼號も出るといふ事だが來るべき第三輯に於て私丈けでも彼に對する所感研究並びに一二の詩篇の翻譯も發表しやうと思つてゐる。近代モデルヌ的といふ言葉の齎らすあらゆる「複雜」を有つた詩人、そして驚くべき「統合」を有つた詩人、汎世的であつて國民的であつた詩人、英雄的であつて天才的であつた詩人——私は彼に依つて人性に徹し眞實に徹し光輝と幻惑とを一如に見且つ表現した「生命の流れ」を感得する歡喜を有つ。

\*

良し藝術が一般的になればなるほど良し素人アマチュアが出る。今の繪畫界音楽界などでは可成り良し素人アマチュアがある。然るに詩に至つては殆んどそれが無い。勿論詩は俳句や短歌ほどとツつきがよくないと同時に見當も付かないといふ事はあらう。これには詩家の罪も存してゐやうがそれよりも詩を侮蔑するやうな態度にともすると出る事を甚遺憾に思ふ。四十面下げて詩でもなからうといふやうな妙な分別臭い（然し人間として實に哀れな）考へを出す。これは今日の教養ある人士に詩が歡喜でもなく生活の慰安でも興奮でもないつまり若いものゝお道樂に見られてゐるからだ。顧みて種々の青年文學雜誌の詩欄など

を見てみると自分らの思ふほど詩の投書は貧弱でない。この事は今の若い人は可成りに詩を愛してゐるといふ事がわかる。けれども詩が若い中學生や青年に愛されるといふ事はむしろ當然な事で、換言すれば寧ろ夫は年頃になれば面麴が出るといふやうな公然たる生理的現象と云つてもいい位で誰一人青春の時期に詩を振り捨てるものはないのである。けれども詩が眞に人生の伴侶となり生活の歡喜となるにはもつと中年者、壯年者の中にも喰ひ入らなくてはならない。吾々は未だ青年であるが故にこの事を切に感じる。即ちもつと社會の教養ある紳士が詩を讀み詩を作る心だけでも興して貰ひたく思ふ。待合に出入する事と謠曲を唸る事と偶々講談本を御讀みになる以外には何らの「生活の歡び」を感じない方々に特に願ひする。——しかしこう云ひ乍ら今の所謂文壇の諸公が詩に就いて無智で冷淡で且つ不遜な態度あるは何よりも惡である。實際今の世に所謂文士位馬鹿で生意氣で根性曲りな奴はない。彼らから詩が侮蔑せれる事は寧ろ詩の幸福かもしれない、三面記事の繼ぎ剝ぎをやる三文小説家よ。頭のない口先ばかりの月評子よ。郷等には頭から硫酸をぶつけてやれば足りる。ヴェルレーヌは三十年も前にいい事を云つてくれた。『餘は文學のみ』と。そうだ、詩の理解ない奴が所謂『文學』を云々する。

\*

自分は今度短い三部作を發表した。この中で前の二つは既に一度「文章世界」で發表したものだか三つは互に關聯あるものだからわざ／＼入れた。「想」の前へくるのは前輯の「序曲」なのだがこれは省いた。自分はこの作を以て誇るつもりはないが腹には誰に何と云はれても關はぬ自信を有つてゐる。その自信は段々に自分を増大さし成長さしてくる。

\*

手元におくられた詩集や雑誌を一々細く批評して見たいが餘白がないのでよす。然し諸家の勞作に對する厚意は充分に有つてゐる。中で大分前に出たものだが米國にある佐々木指月君の詩集「郷愁」は非常な懷みを以て讀まれた、そして氏に詩人としての良い素質を澤山見出した、この種の詩がほんとに人間の心から生れたものである。前田夕暮君の「深林」に就ては既に「詩歌」にかいた。生田蝶介君の第一歌集「長旅」は同君の新しき生活への進軍として人生に對する氏の愛を見出て、嬉しい。歌其のものに對しては可成りに論議はあらうがその門出を祝する。「感情」では高村君室生君の作を面白く讀んだ。山村君の今迄と傾向を變へたものにはやく私の賛成するものがある。萩原君のは詩集を見てから何か云ひたい。

「詩人」では皆揃って熱心なのが嬉しい。殊に摯實な研究があるのがいい。『未來』もすつきりしてゐる。生田長江氏の詩は珍らしいものである。三木君の作が尠いのが惜しい。

紙の値段や印刷のインキが馬鹿に騰つてゐるので『伴奏』を止むえず値上げして一部四拾錢とした。その代り前號より頁は増やした。三拾五錢では實際の處少し損をしてゐるのだ。然しこれは一部賣の事で社友には決して變りはない、従前の社費で無代配布する、それから今度支社に對する規定を一二清規中へ加へた。支社を立てたいと云ふ有志の方から色々云はれるので。

私は社友諸君の種々の勞力を謝すると同時に諸君からもつと同志に詩の道を喧傳して貰ひたく思ふ。

それから社友諸君の作物は紙數の都合で全部載せ切れない處から更に撰つて超れたものゝみを掲げた。正直の處これを見て下さいと誇らしく世間に發表する迄に至つてない作が未だ多分を占めてゐるからだ。奮勵をのぞむ。

本輯にも豫定通りの先輩知友諸氏の原稿が頂けなかつた。「春の卷」は眞に燦然たるも

のにしたく今から諸家にも御願ひしてゐる。與謝野寛氏からはアンリ・パタイユの戦争を歌つた詩を下さる筈だ。今度間に合はなかつたので高村光太郎氏からは可成り長い詩を下さる。齋藤茂吉氏島木赤彦氏なども「春の卷」には歌を寄せて下さるとの事だ。その外まだ確としたお約束はないが少し方面の變つた方々からも寄稿して頂くやうになると思ふ。

「春の卷」へ出す社友の原稿は二月十五日で切らうと思ふ。

本輯の挿畫とした「瓦焼き」は奥州須賀川の畫家で文化時代に既に西洋風の畫を畫き自ら銅版に鑲刻した亞歐堂田善の複製銅版である。これは東洋美術に造詣深い澤村氏が特に「伴奏」のため贈られたもので私の愛玩措かざるものである。圖は「今戸焼」の光景である。單に異國趣味に溺れた畫家といふのではない。既にこの時代鎖國の夢に守られ乍ら「自然の發見」に驚くべき細緻な觀察を有つてたわが日本の一畫家の存在に對して新しき驚異を見出すのである。落款はすべて和蘭佗綴でかゝれてゐる。圖の下にあるのは夫を其のまゝ活字にしたので「陸奥須賀川亞歐堂田善」と綴つたのである。

自分は「伴奏」の編輯並びに曙光詩社の事業以外に他に大部な雑誌の編輯をしてゐる。「新家庭」といふで、自分の時間の大部分はこちらに使はれてゐる。従つて用務に關する書信以外殆んど普通の挨拶めいた手紙などかけない。社友諸君が下さる書信に對しても用件以外のものは厚意は有ちがから忙用に紛れてよく失禮して終ふ。又添削や「伴奏」の發行もこんな事でよく遅れて終ふ。併しそれは自分の怠慢でなく「時間」のないためだと思つて寛容を願ひたい。

それから在京社友の方々のため訪問されても不在勝ちであるから一ヶ月に二度の面會日を定めようと思ふ。其は毎月廿三廿四兩日の午後とする。でない限りは毎日早朝が夜入時以後である。

詩歌講義録はこの本より五六日おくれて出る。お手元に届くのが遅いかもしれぬがこれも同様自分に「時間のない」ためだ。不悪。

伴奏 第二輯(新春の巻)——終り

大正六年一月廿日印刷  
大正六年一月廿六日發行

伴奏第二輯  
(新春の巻) 奥付

伴奏

不許複製  
定價金四拾錢  
郵稅金四錢

編輯兼發行者 川路誠

刷者 飯島省一

東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社分工場

發行所 東京市小石川區丸山町十七番地 曙光詩社

### □曙光詩社清規□

#### 詩社の目的

□曙光詩社は、新しき詩歌の作者、研究者、愛好者より成る一團です。

□曙光詩社はあらゆる詩歌の作者、研究者、愛好者に資するため、一般社友を募集し、年五回詩文輯「伴奏」を發行し、尙初心者のため同附録として「詩歌講義録」を刊行して之を願ひます。

□曙光詩社はその一切を川路柳虹が主宰し社友の詩歌に對する批評添削質疑に應答します。

#### 社友及作物

□社友は二種に分ち、普通社友特別社友

とします。普通社友は毎月左の種別の原稿を送付し之に對する批評添削を乞ふ事が出來ます。

- △長 詩(行數を問はず) 三篇迄
  - △小 曲(十行以内の詩) 五篇迄
  - △散文詩(百行以内) 二篇迄
  - △短 歌 二十首迄
- 特別社友は左の種別によつて批評添削を乞ふ事が出來ます。

- △長 詩(行數を問はず) 五篇迄
- △小 曲(十行以内の詩) 十篇迄
- △散文詩(百行以内) 五篇迄
- △短 歌 四拾首迄

(右の範圍内に於ては一人にして數種を兼ね寄稿して差支ありません)

□批評添削を乞はるゝ原稿は字體明瞭に現住所氏名を明記し各行間に餘白を存することゝ貳錢郵券を添へる事とを注意して下さい。「伴奏」誌上に掲載すると否とに關はらず原稿到着の日より十五日以内には加筆して返却します。掲載すべき原稿は指定しますから返稿の中から其の作物丈け再び清書して寄送して下さい。原稿締切は毎卷發行前二十日とします。

#### 「伴奏」及「詩歌講義録」

□「伴奏」は年五回發行の菊半截形紙クロース毎頁百五十頁内外の優美な詩集で社友の詩文及現代詩壇の諸名家が得意の創

作を掲載する他研究材料として 毎篇川路柳虹の詩論若くは評釋を掲げます。

□「伴奏」は一年五回左の期節に於て發行します。時日は出版の都合で一定しませんが凡そ其の月の十日前後とします。

- 新春の卷(一月) 春の卷(三月)
- 夏の卷(六月) 秋の卷(九月)
- 冬の卷(十一月) 別 輯(臨時)

□「伴奏」は社友には無代で配布します。□「伴奏」は毎卷特に初心者のため附録として「詩歌講義録」を附し特別社友には無代で配布する他實費貳拾錢送費貳錢を以て「伴奏」同様希望者に願ひます。

□「詩歌講義録」は菊半截形四十頁内外の小冊子で専ら初心者のため詩歌の概論作

法評釋等に涉つて、川路柳虹が講義をしま  
す。

社費及講讀費

□社友は普通特別共に毎月社費を納める義務があります。普通社友は一ヶ月金參拾錢、參ヶ月分金九拾錢、六ヶ月分金壹圓八拾錢、一年分金參圓五拾錢とします。又特別社友は同様に一ヶ月金五拾錢、三ヶ月分金壹圓五拾錢、六ヶ月分金參圓、一ヶ年分金五圓五拾錢とします。社費は便宜上三ヶ月分以上を納付せられたき事、又毎月送附せらるゝ方は必ず前月末迄に翌月分を前納せられたき事、送金は必ず郵便爲替に限る事等々注意して下さい。  
□入社希望の士は必ず規定の社費を添へ

て御申込み下さい。又入社退社は隨意なるも途中退社には前金を返却しない事に決めます。前金切の節は「伴奏」の包紙が端書で御通知します。

□社友とならず單に講讀者として毎卷發行毎に「伴奏」を講讀するゝ事は自由です。但し作物を寄稿する権利はありません。「伴奏」講讀者は一冊金四拾錢 郵税四錢 三冊分郵税共金壹圓參拾二錢、同五冊分金貳圓二拾錢です。  
□「伴奏」附録「詩歌講義録」は直接講讀者以外に書店に於ては販賣しません。講義録の無代配布を受けるものは特別社友のみに限ります。普通社友で希望の士は實費を別に出すか特別社友に變つて下さい。

但しこの講義録は詩歌の初心者に向つて發行するものですから特別社友であつても要用なき人には送附しません。

□「詩歌講義録」の講讀費は一冊二十錢 郵税貳錢、三冊郵税共六拾六錢、五冊同壹圓拾錢とします。

□「詩歌講義録」は一年五回を以て終ります。其の第一回は大正六年一月より同十二月に至つて完了します。「詩歌講義録」は「伴奏」の發行毎に一冊づゝ發行する以外には刊行しません。但し講讀は何時でも隨意です。

支部及支社

□本社の社友三名以上のある土地には支部を設ける事が出来ます。また十名以上ある土地には支社を設ける事が出来ます。支社の命名には其地方の名と上に曙光詩社といふ文字をつけて其の存在を明かにします。支社には毎卷一部づゝ「伴奏」を送り

ます、支部並びに支社に對しては會合上のあらゆる便宜を計ります。

□支部並びに支社に於ては社友の社費を纏めて本社に送る事も出来ます。

社友の特待

□社友(普通特別とも)五名以上紹介された方にはその勞を謝する爲め若し普通社友なら其の社費を以て特別社友の待遇をし特別社友である場合には半年間の社費を免除します。

□特待を受けた社友には東京で發行する文學書籍(雜誌を除く)講入の場合に定價の一割引で買つて差上げます。

川路柳虹著作

- 路傍の花(絶版) 東雲堂
- かなたの空 東雲堂
- ヴェルレーヌ詩抄 白日社

### 詩歌講義録(伴奏附録)

一冊定價貳拾錢郵稅二錢  
大正六年一月第壹回發行  
每冊四十頁 體裁 瀟灑

「伴奏」附録として今春一月より發行する「詩歌講義録」は専ら初心者のため詩の何物たるかを説き併せて詩の作法評釋歴史等に及ぼし回を追ふて微より細に入る覺悟です。詩の何物たるかを會得し詩の本質に觸れんことを乞はるゝ諸君に取つても有利な書であると共に詩の作法を説く書としてこれ以上完膚なものはないと信じます。本講義録は本詩社の社友及び直接講讀者以外には絶對に販賣しないものでありますから其の御積りで御覽下さい。本講義録の執筆者はすべて川路柳虹氏であります。

- 詩とは何か(詩歌概論) 詩の種類——詩の形式——詩の本質——西詩綱要
- 長詩作法 □短歌作法 □詩歌に要する語彙
- 「萬葉」及「古今」 □新詩評釋 □明治詩史

發行及發行所 東京市小石川區丸山町十七 曙光詩社

## 窪田空穂著 西行景樹守部

### 短歌講義叢書第二篇

本書收むるところ「西行」は彼の山家集の著者として歴観なき僧西行の人間生活と藝術とを論じて氏が特異なる卓見なり、「景樹」は近世の一大歌人にして歌學者たる香川景樹の「東場遺言抄」「隨所師說」「詠草奥書」「桂園遺文」等に加へて、一面景樹の歌論を現代の歌壇に移轉せる批評を加へて、「守部」は我が國各時代を通じて最も傑出せる古典研究家たり且つ萬葉學者として有名なる「萬葉集墨繩」萬落集檜抓の著者たる橋守部が「短歌撰格」の全部を平易にして含著深き辭をもつて紹介せるもの、現代の歌壇に薦む。

新裝發賣價五拾五錢(送料不要)

### 内容充實せる新年號

## 詩歌

- 守部の歌學 窪田空穂
- 論斷片 若山 空穂
- 平賀元義 尾山篤二部
- 橋曙覽の歌 前田 夕暮
- 無爲の白歌 高村光太郎
- 船乗の狂歌 福士幸次郎
- 人間の亂加藤 介春
- 切株のの 暮鳥
- 青桐のの 犀星
- 短詩二十章 白鳥 省吾
- 立體派の詩山宮 允
- 愛の塔 萩原朔太郎
- 作詩信條 萩原朔太郎
- 歌壇時評 前田 夕暮
- 詩壇月評 福士幸次郎
- 牛葉 古泉 千樞
- 落葉 湯熊谷 武雄
- 橙の 湯熊谷 武雄
- 冬の 雨前田 夕暮
- 金子藤子
- 楠田
- 中島
- 鶴澤
- 音馬
- 阪口
- 阪田
- 篠岡
- 村岡
- 西崎
- 米田
- 原阿
- 社友數百名
- 不泣
- 朝花
- 敏郎
- 哀浪
- 政司
- 藻實
- 祥津
- 黑影
- 快平
- 佐郎
- 百緒

社日白 保久大西外市京東 用入規清社日白 集募友社

第十卷  
第一號

# ア ラ ギ

特價金  
拾錢  
郵稅錢

新年倍大號

□宇宙の生命(論文)……………石原純  
 □白雲上人寫生の卷(評傳)……………田中松  
 □萬葉集私論(其三)……………釋迢  
 □山家集私論(續編)……………齋藤茂吉  
 □板上偶語(歌論)……………島木赤彦  
 □林泉集を讀む(歌論)……………河西省吾

ゲーテ詩抄 (阿部次郎)  
 前月短歌詳評 (釋迢空)

橋守部遺書 **萬葉集檜婦手** 新刊發賣  
 正價八十五錢  
 郵稅八錢

附錄 平賀元義傳 (羽生英明)  
 萬葉集丁數索引 (正宗敦夫)

深狭木 川霧根 齋藤千 古泉  
 木根村 島木藤 千  
 峽村 中島赤 彦  
 孤方 石原 憲  
 箱の 釋原 迢  
 鶴山 平瀨 泣  
 千鶴草 園 (短歌)……………山田邦子  
 (短歌)……………崖

特別會員每月十五錢 誌友募集 普通會員每月十三錢

東京市小石川區上富坂三二いろは館内  
 久保田俊彦方 **ア ラ ギ** 發行所 (振替東京) (二八三三)



